お茶の水女子大学中国文学会創立三十周年を記念する思い出の記

矢嶋美都子

お茶の水女子大学中国文学会が創立されて三十周年、おめでとうございます。歴代の専任の先生がた、委員及び会員の皆様のご努力の積み重ねの結果です。私が修士課程を修了した一九七五年の三月に本会はありませんでした。それで一九七九年四月に亜細亜大学専任講師に採用されるまでの四年間、夢中でしたが今思えば大変難儀な就職活動をしました。論文の若書きはいけない、よく熟成させてから発表しなさいとのご指導をいただきましたが、母校に論文を発表する紀要はもちろん研究発表の場すらない変な感じは、今の学生諸子には分からないと思います。頼惟勤先生に愚痴をこぼした時、発表の場のない論文は本箱の上に置いておきなさい、醗酵しますから、とにっこり妙案を提示していただいたのは懐かしい思い出です。同じころある偉い先生から、お茶大の修士を持っていれば天下御免だよ、とも慰められて改めてお茶大は超名門ブランドなのだ、と認識したりもしました。一九八一年四月に本会が発足しました。私の就職活動は終わっていましたが、とても嬉しかった記憶があります。頼先生をはじめ近藤光男先生、佐藤保先生、中山時子先生など当時の専任の先生方のご尽力のおかげです。一期生の平松圭子先生、助手室に勤務されていた黒沢さんや古い同窓生がずいぶんお手伝いなさったそうです。最初のころの学会は、本当に錚錚たる顔ぶれの先生方が毎回ご出席のみならず、ご発表もなさり在校生、卒業生も多

く参加してとても盛会でした。定期的に開かれる学会や例会は、とかく疎遠になりがちな母校にお邪魔できるありがたい機会です。定期的に開くというのは単純なことですが、これを三十年間継続するのは並大抵ではありません、この継続力こそがお茶大が名門ブランドを維持している根本と確信しています。

私は二〇〇三年四月から二〇〇七年三月までの四年間、本会の委員長をしました。委員は学会、例会のほかに何度か集まって準備作業をするのですが（委員が東京在住の人に偏り固定しがちな弊害はあります）、皆さん本当に毎回まじめに出席し、会議になると忌憚のない意見がどんどん出て、たいしたものです。前任の石田知子さんから引き継いだ時、どのような段取りで進めたらよいか不安でしたが、石田さんが魔法の手引き？を渡してくださいました。歴代の委員長に渡されるいわゆるマニュアル本で、佐藤保先生のころにほぼ完成したらしいのですが、折々の修正も入っていて、何時ごろどのような作業をするか年間活動スケジュールがきちんと整理されていて、とても助かりました。歴代の委員長、委員の皆様の責任感がつまっているなと感動し、感謝しつつ活用しました。私のころの仕事で記憶に残るのは、二つあります。一つは例会の発表者を古典文学、近現代文学、音韻言語の三部門から毎回一人ずつ登場してもらうこと。そのさいに修士論文を提出して通った方を最優先で発表していただく、さらに是非とも地方在住や非常勤で頑張って研究を続けている方にお願いしたいと思いました。そのために、一年くらい前から発表の内諾を頂いておきました。一ヶ月くらい前に発表しろといわれてもなかなか間に合いませんし、せっかく発表していただくのですから十分準備してほしかったからです。力作、ハイレベルのご発表が続いたと思います。特に修士論文を書いた方は、博士論文もお書きになると思いますので、例会で何度もご発表をなさり、論文を中文学会報に毎年のように投稿してほしいと期待しました。現在は、時代が変わり、価値観も多様化していて、三十年前の「お茶大の修士を持っていれば天下御免だよ」はなかなか通用しません。

留学経験や論文の本数が求められています。本会を活用して専任の職を得てほしいと願っています。

次は『お茶の水女子大学中国文学会報』の電子化公開と著作権の扱いです。電子化公開はわりとスムースに決まりましたが、前提条件の著作権の扱い、処理が少し困りました。次から発行される二十六号以降は、著作権をお茶の水女子大学中国文学会に帰属させ転載したい時は申し出ること、と決まりましたが、以前の二十五号までについては、著者（百人くらいになります）一人一人承諾のサインを頂くことになったのです。しかしこれも驚いたことにあっという間にほとんどの会員の方から承諾の連絡があり、拒否なさる方もきちんとお考えを付記されてお返事をくださいました。退会された方、故人になられた方、すでにご退職された先生との連絡にも少し手間取りましたが会員の皆様や関係各位のご協力で解決できました。それと事務処理です。特に会計の記録が会計担当の委員の手書きで記録し、それを保管するという本会が発足した時のままの形態が真面目に継承されており、会員数が増えた実情から見ると会計担当者の負担が多く、散逸や記録ミスしやすい危険にさらされていました。それを除くために、パソコンに入力処理するように会費からアルバイト代を支出し整理しました。こういったことは、とかく助手さんのボランティアになりがちで、お願いしにくいままに古い記録方法を残していたと推察されますが、時代が変わりました。支払うべきものは支払ってきちんと処理した方がよいと思います。以上のことは、誰が担当の時でもできたこととは思いますが、お茶大中文科へのささやかな恩返しができたと自己満足しています。

恩返しといいますのは、私は一九九八年三月にお茶大から博士号を授与されました。修士号をいただいてから四半世紀も経っての博士論文提出ですから、当時の中文の先生方、主査の藤山和子先生やもともとの主査の佐藤保先生（学長に就任されたので藤山先生が引き受けてくださったのです）、宮尾正樹先生、相原茂先生にはご多忙

の中、本当にお世話になりました。主査の藤山先生はご自身の退官を直前に控えて大変な時期でしたでしょうし、佐藤先生はお茶大の学長というすごい重責を担われたばかり、それなのにお二人の先生には何度も拙い論文を見ていただき、修正箇所のご指摘をいただきました。そのおかげで何とか博士号を頂くことができました。いくら感謝しても感謝したらない気持です。この場をお借りして心からのお礼を申し上げます。そしてお茶の水女子大学中国文学会のさらなる発展を祈念します。